

上房郡北房町中津井

大谷 3 号墳発掘調査報告

— 国道313号線中津井バイパス
建設に伴う調査 —



1975年3月



北房町教育委員会

序 言



国道313号線道路改良工事(中津井バイパス)施行にともない、大谷古墳3号の発掘調査報告書がここに発刊されることになりました。

昭和49年6月発掘調査に着手してから2ヶ月、関係者の梅雨時に際して並々ならぬ発掘作業と現場担当者の資料整理と研究に努力を重ねられた記録をまとめたものであります。

当地方では初めての横穴式石室古墳の発掘調査であり、調査に当たられた県当局並びに関係者各位の多大の御指導と御協力を賜わり、早期にこの調査が完了しましたことを厚く御礼申し上げます。

この報告書が埋蔵文化財に対する認識と理解のためにわずかでも御参考になれば望外の喜びとするものであります。

昭和50年3月

上房郡北房町教育委員会

教育長 米 倉 都 男

例 言

1. この報告は、国道313号線（成羽～勝山間）中津井バイパス建設工事に伴い、北房町国道313号線道路改良工事埋蔵文化財包蔵地調査委員会（以下調査委員会と略す）が、岡山県高梁土木事務所の委嘱を受けて実施した大谷^{おおや}3号墳の発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は、調査委員会が主体となり、北房町教育委員会~~社会~~教育課長、清水光雄、岡山県教育委員会文化課文化財保護主事、伊藤 晃が現場を担当し同文化課、西口秀俊、光吉勝彦、葛原克人、下沢公明、枝川 陽、津山教育事務所、栗野克己、山磨康平、高畑知巧、浅倉秀昭、竹田 勝、整理にあたっては、柳瀬昭彦、江見正己、中野雅美の諸氏の援助を受けた。

また、地主の太田博文氏、太田富美子氏にはひとかたならぬ援助を受け、種々御迷惑をかけた。記して深謝を表したい。

国道313号線道路改良工事（中津井バイパス） 埋蔵文化財包蔵地調査委員会名簿

委員長	米 倉 都 男	（北房町教育委員会教育長）
副委員長	三 好 喜 一	（ ” 文化財保護委員会委員長）
委員	小 林 孝 男	（県教育庁文化課長）
”	山 根 隆 志	（北房町文化財保護委員）
”	毛 利 博	（ ” ）
”	横 上 英 雄	（ ” ）
”	本 多 一 雄	（ 北房町建設課長 ）
”	西 口 秀 俊	（県教育庁、文化課課長補佐）
幹 事	清 水 光 雄	（北房町教育委員会、 社会 教育課長）

目 次

序 言		
例 言		
第 1 章	調 査 経 緯	1
第 2 章	大谷 3 号墳の位置とその周辺	3
第 3 章	大谷 3 号墳の概略	5
	1) 古墳の規模および概略	5
	2) 出土遺物	14
第 4 章	まとめにかえて	15
付	大谷 1 号墳の概略	16



発掘調査前の大谷 3 号墳

第 1 章 調 査 経 緯

国道 313 号線は昭和 45 年に新しく国道になり、それに伴い各所で改良工事あるいはバイパス工事が進められている。

この北房町内の中津井バイパスも旧道とは別に新しい路線が約 4 km にわたって計画された。この区間には、北房町教育委員会による分布調査によって大谷 3 号墳の所在することが判明していた。この古墳は、地主の太田博文氏宅のすぐ西に接し、太田氏宅によって昔から地神信仰として祭祀の対象にもなっていた。このため、県教育委員会、町教育委員会は、この古墳を避けて設計すべく高梁土木事務所と交渉を重ねてきたが、県教委の要望にそって古墳を残して設計した場合、西側にふれば切土との関係で西上方の部落からの取り付け道が急勾配になり危険であり、また東側にふれば直接太田氏宅にかかり、これも無理である等々の理由により、発掘調査を実施し記録を残すことになったのである。

昭和 49 年 1 月 8 日付けで高梁土木事務所より発掘届が提出され、北房町が調査を実施することになったのである。町教育委員会から派遣依頼をうけ 6 月 29 日から現地調査に入り、8 月 2 日で終了し、以後整理作業を進めた。その間、上記の方々の支援と協力をうけた次第である。



調査前の大谷 3 号墳

調査日誌抄

- 5月23日 北房町教育委員会で調査委員会を実施し、具体的日程等を打ち合わせる。
- 6月20日 下草は太田さんの手をわずらわして刈込み後、古墳上にある椿等の立木伐採と地形測量を行う。
- 24日 快晴、夕立、天井石、奥の2枚はずれていることを確認。
- 25日 快晴、天井石をチェーン・ブロックで除去（北房町内には業者なく高梁の業者にたのむ。）
- 26～29日 石室内埋土除去
- 7月 1～ 6日 梅雨入り、雨が多く作業進まず。
- 8～11日 床面清掃
- 20日 人骨の処理に手間取りやっと床面清掃完了。写真撮映。
- 22日 割り付け。
- 23日 実測開始、遺物、人骨取りあげ。
- 8月 2日 実測、写真等、現場での作業終了。
- 8日 北房町文化財専門委員会で概要報告。
- 8月～3月 整理事業を遂時行う。



天井石をチェーンブロックであげる

第 2 章 大谷 3 号墳の位置とその周辺

旭川の一支流である備中川は、北房町^{あざえ}皆部で南から中津井川の小支流と落ち合い東に流れを変えて落合で北からの本流である旭川と合流する。この大谷 3 号墳は、中津井川の中程、皆部から約 2 km ほど上流の西岸の丘陵突端部に位置している。周辺の遺跡を概観すると、中津井川流域には、後半期の古墳をはじめ、弥生式土器や須恵器片が散布している地点が何ヶ所か発見されている。縄文時代の遺跡は中津井川流域では発見されていないが、中国縦貫道の建設工事に伴う調査が行われている桃山遺跡（皆部）や、谷尻遺跡（谷尻）などの備中川流域で早期、後期・晩期の土器片などが出土している。

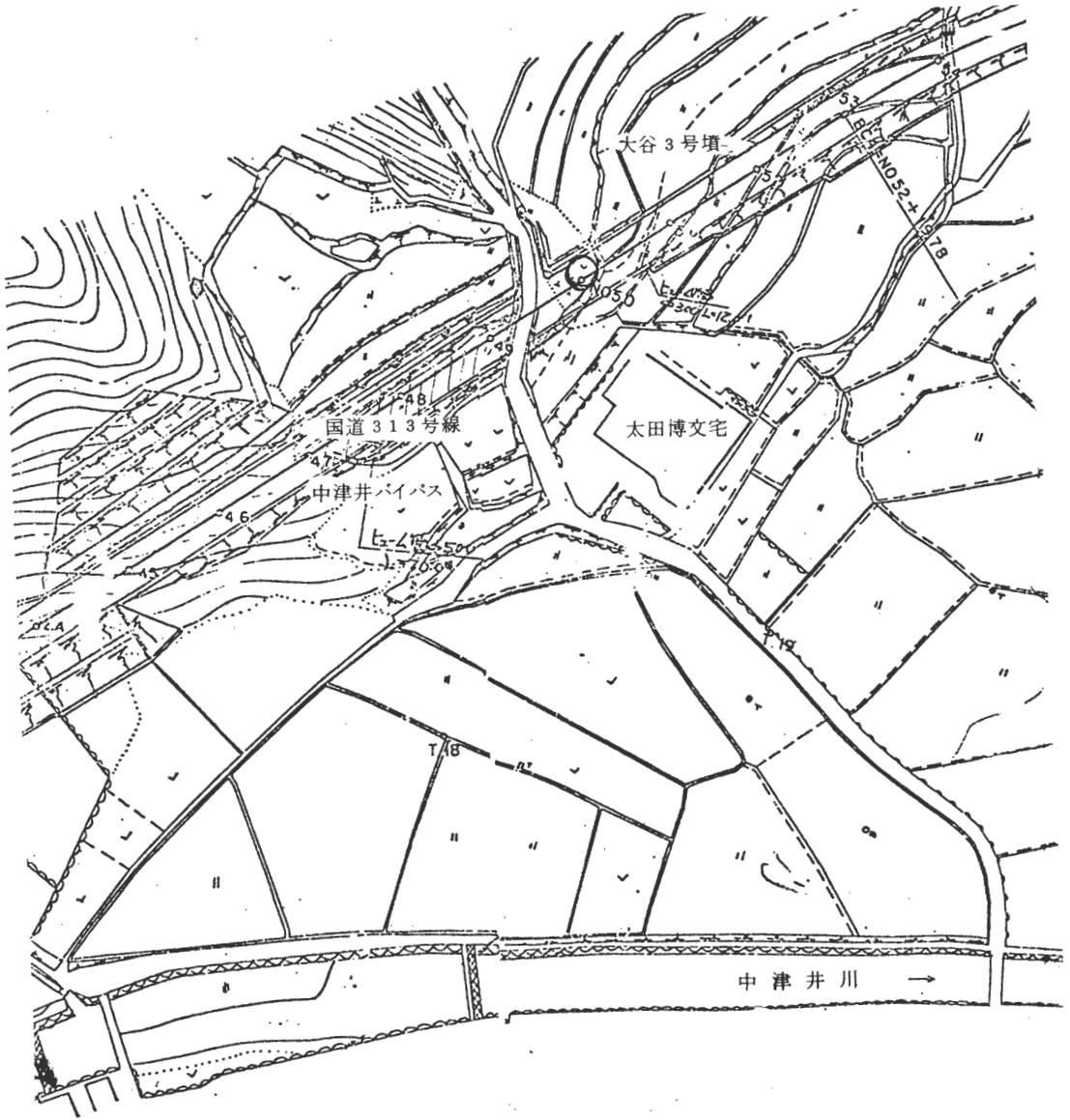
弥生時代・古墳時代についても先の遺跡では前期から後期、古墳時代全般を通じて調査され遺構も検出されている。中津井川流域では、祭祀遺跡と思われる矢の内遺跡で弥生時代後期後半の土器が多量に出土している以外は知られていない。

古墳は、横穴式石室を持つ後半期の古墳を中心に約 30 ヶ所程存在している。大谷 3 号墳もこの中の 1 基で、1 号、2 号墳は、同じ丘陵頂部にあり、1 号墳は後述するが、石灰岩で切石状に造られ、石室内に須恵質の家型陶棺を持っている。東岸には、町指定になっている定東塚、西塚古墳があり、東塚は前方後円墳といわれているが、現状でははっきりしない。これらの横穴式石室には土師質陶棺を伴っている。

また、中津井の谷をぬけ峠越えをして、高梁川をくだれば備中の中枢部にぬけることの出来る交通要衝の地であることも書きそえておこう。



第 2 図 中津井川流域遺跡分布図
(1/25,000)



第3図 古墳位置図

第 3 章 大谷 3 号墳の概略

第 1 節 古墳の規模および構造

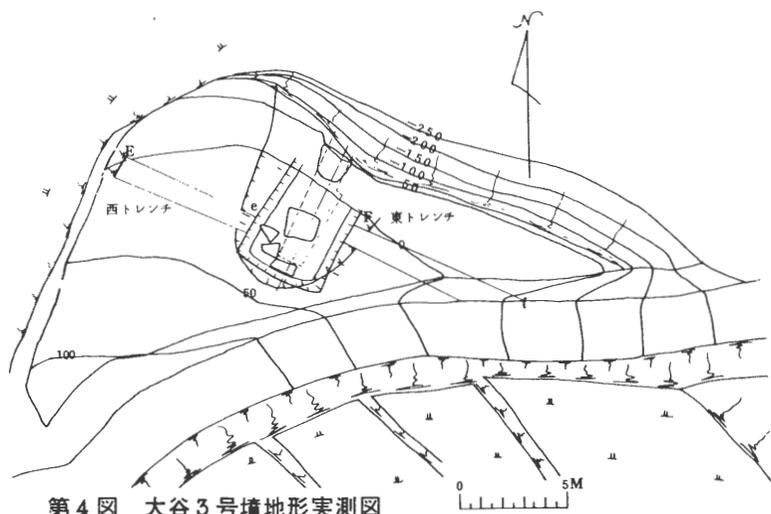
大谷 3 号墳の墳丘は、ほとんど残存しておらず周辺も畑・草地あるいは果樹等が植えられ改作されており、わずかに天井石が残っている部分が少しの高まりを残し、その石室の天井石を中心に太田氏宅において昔から祭祀が行われていた。

南側のトレンチの状況から見れば、直径 10 m 前後の円墳ではないかと考えられる。

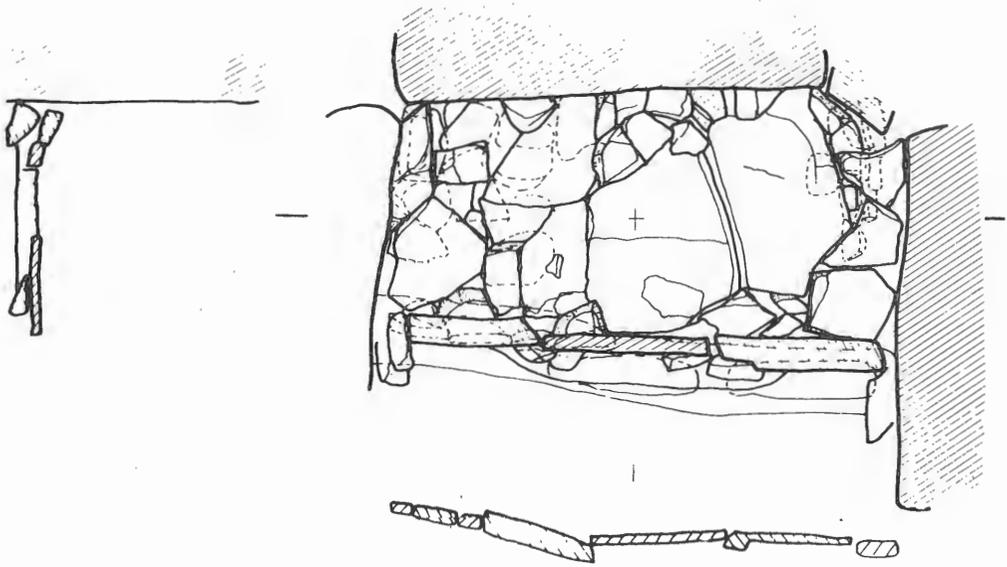
石室は、東に開口する右片袖の横穴式石室である。石室内部は、明治時代以降度々盗掘にあっている。そのためかどうかはわからないが、天井石はほとんど元位置からすこしずれたり内部に落ちこんでいた。石室現存全長 6 m 50 cm、玄室幅は奥壁の部分で 1 m 10 cm、最大幅 1 m 45 cm、長さ 4 m、羨道幅 1 m 10～15 cm、現存長 2 m 50 cm である。高さは天井石が元位置を保っているものがなかったためはっきりしないが、奥壁周辺の状況から 1 m 50 cm をくだらないものと考えられる。羨道部分の高さについては不明である。

奥壁から 60 cm 入口より 3 枚の板石を立て別の区画をもうけている。この中の底部には板石を敷きつめ人骨が集められた状況を呈していた。人骨の下から刀子が 1 点出土しているのみで、他の遺物は存在しなかった。これは追葬の段階において人骨を集め、新しくこの区画をもうけ収納したのと考えられる。

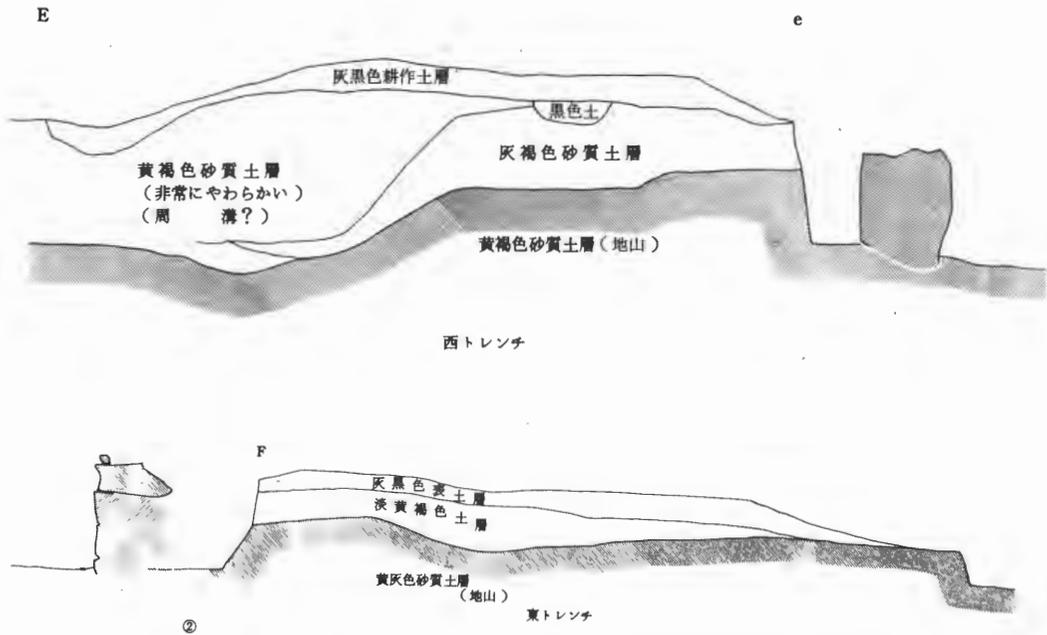
石室内は、こぶし大の河原石を敷きつめ、棺台になると考えられる場所にはレンガ大の石を置いている。石室に使用されている石はすべて石灰岩であるが、敷石等にはいっさい石灰岩を使用していない。



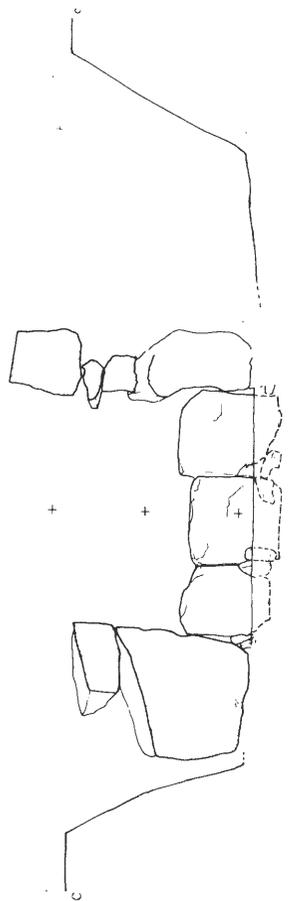
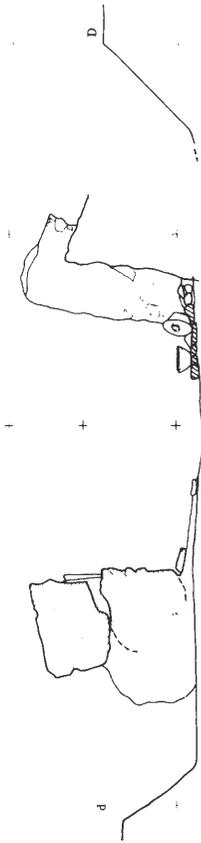
第 4 図 大谷 3 号墳地形実測図



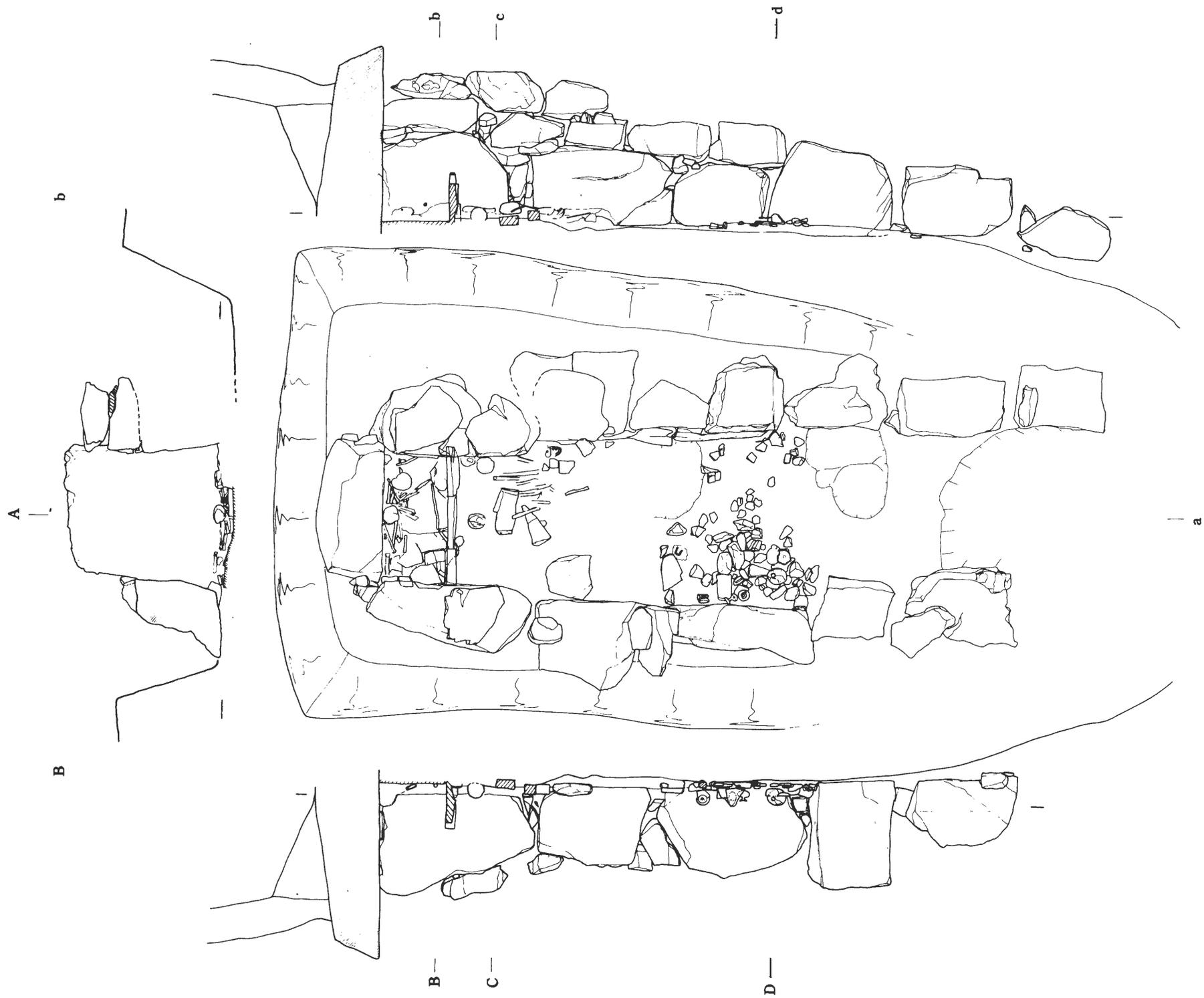
第5図 石室内別区画実測図(縮尺1/20)



第6図 大谷3号墳東西トレンチ断面図



大谷3号墳石室実測図（縮尺1/40）



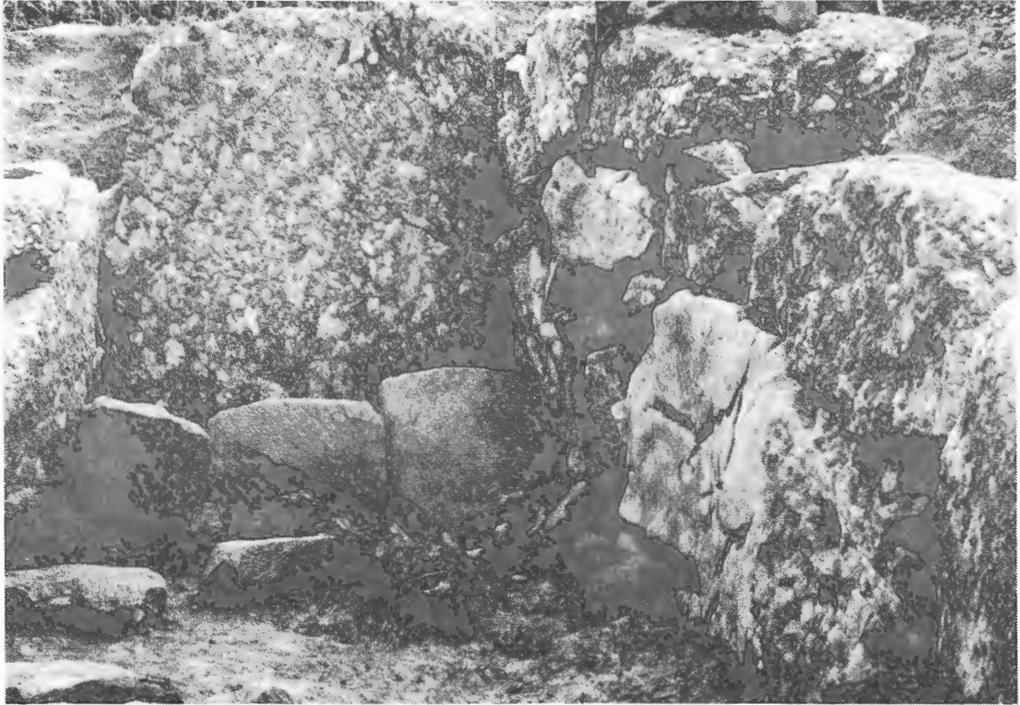
第7图 大谷3号填石室实测图(縮尺1/40)



石室内部入口より



石室内部奥壁より



奥壁をみる



人骨出土状況



奥壁区画内人骨出土状況



奥壁区画内敷石



遺物出土状況



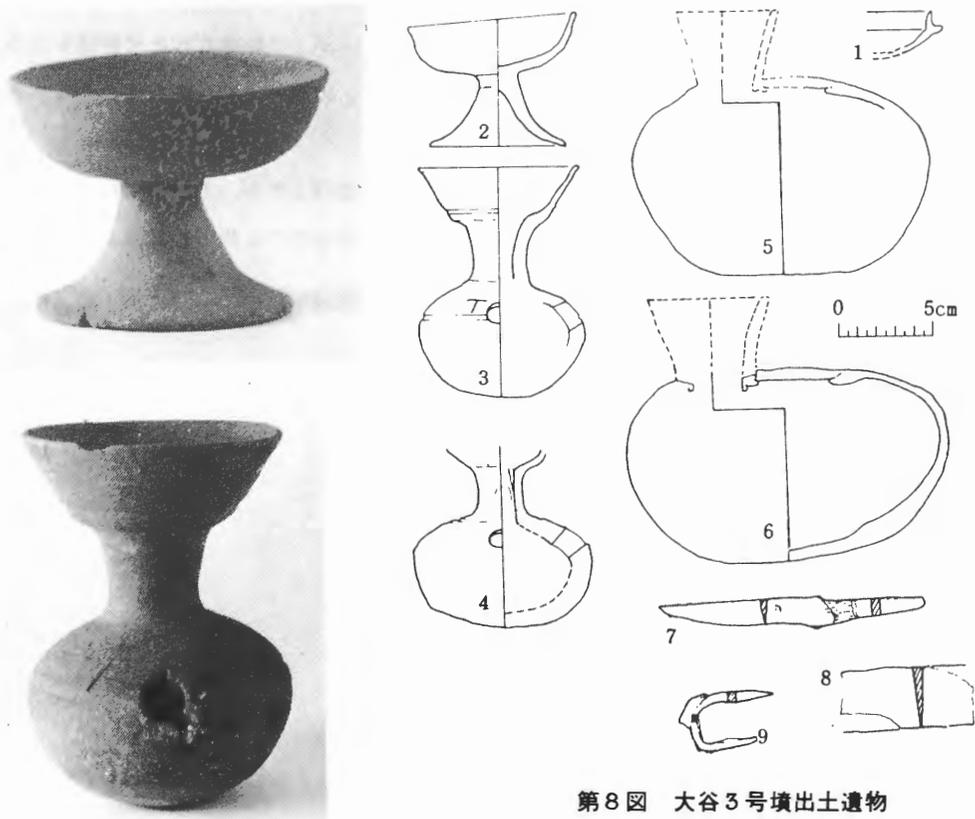
遺物出土状況

第2節 出土遺物

石室内からの出土遺物は、須恵器、刀子、刀の破片などである。その他には、江戸時代初め頃と考えられる千鉢物1点、古銭、備前焼の破片などが出土している。これらは、地神信仰の時供えられたものであろう。

1の須恵器杯身は、小破片で口径は計測不可能である。2は小型の無蓋高杯で口径9cm、高さ7cmを計ることができる。3の罎は荒い胎土で灰色を呈し小砂粒を多く含んでいる。注口部左肩部にヘラ描きのT印の窯印がみられる。4の罎は口縁部を欠損している。雑なつくりで青灰色を呈している。注口部背面にヘラ描きのキ印がみられる。5、6の平瓶は、ともに口縁部を欠損している。5は灰色を呈し、小砂粒を多く含んでいる。6の表面は青灰色、断面茶褐色を呈し、しっかりした焼きである。

7は、奥壁近くの石組め区画内の人骨下から出土した刀子である。長さ14cm、最大幅1.8cmである。8は刀の破片で幅3.2cmある。9の鉄器は□状を呈しているが何に用いられていたか不明である。



第8図 大谷3号墳出土遺物

第 4 章 まとめにかえて

備中の東北部，美作に国境を接する（律令時代以前もそうであったかは疑問点も残るが）この地域は，備中川，旭川を通じ備前地域とはもちろんであるが，先述したように備中中枢部にも通じる要衝の地である。古墳時代後半期においては，美作地方の横穴式石室に多くみられる陶棺がこの地域にも多く用いられ，美作地方の影響を強く受けている。近くの定古墳群にも土師質の陶棺が，大谷 1 号墳には須恵質の陶棺がみられる。しかし，今回調査を行った大谷 3 号墳からは，陶棺の破片はみられず，遺物の出土状況からしても陶棺が存在した可能性は非常に薄い。このことは，この大谷 3 号墳が近在の他の古墳と比べれば，墳丘，石室ともに少し規模が小さいことがこのことを物語っているかも知れない。

大谷 1 号墳は，切石状石室で須恵質陶棺からみれば，時期的には少し後出的であり，定古墳群は，墳丘規模がやゝ大きく，石室のつくりや土師質陶棺などより考えて本古墳より先出的な様相を呈している。

大谷 3 号墳からの出土遺物の須恵器は，追葬も考えられ，築造の年代をあらわしてはいないが，ある程度年代をおさえることのできるものである。破片になっている杯身(1)が少し古く，破片になっていることが追葬の段階（盗掘の時かも知れないが）で粉碎された可能性もある。他の須恵器は，ほとんど同一時期と考えられ，6 世紀後半という一つの時期を与えることができるであろう。

以上のように，大谷 3 号墳の調査の知見から得たことを概略したが，北房町ではもちろん，上房郡においても調査された古墳がほとんど無く，今後分布調査でも新しい知見が加わるであろう。

付 大谷 1 号墳の概略

大谷 3 号墳の調査時において、大谷 1 号墳の石室の実測を行ったので地形測量などは行っておらず不十分ではあるが特異な石室構造をもつ古墳であるのでこゝで概説しておきたい。

大谷 1 号墳は、3 号墳の位置する丘陵頂部、3 号墳の西北 500 m 程の所に存し、周囲に列石が直線上に並び一辺約 15 m 程の方墳と考えられる。

石室は西に開口し、両袖を持つが、それぞれの長さの数値は異っている。

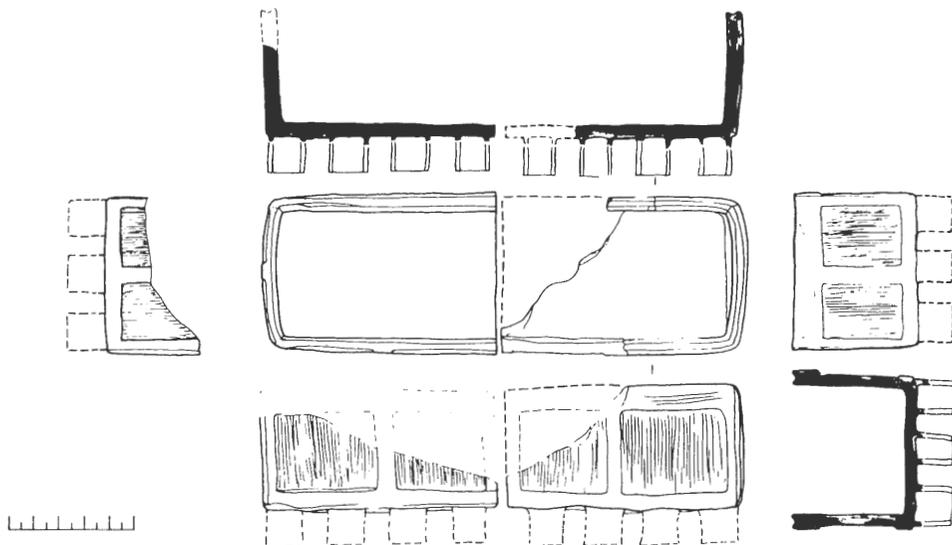
玄室内、奥壁、左側壁、天井石は 1 枚石で他の側壁石も巨大な石材を用い、切石状に築造している。石材はすべて石灰岩である。

石室の規模は、玄室幅 200 ~ 190 cm、長さ右 320 cm、左 300 cm、袖は右 30 cm、左 40 cm、羨道幅 120 cm、現存長右 210 cm、左 300 cm が残っている。

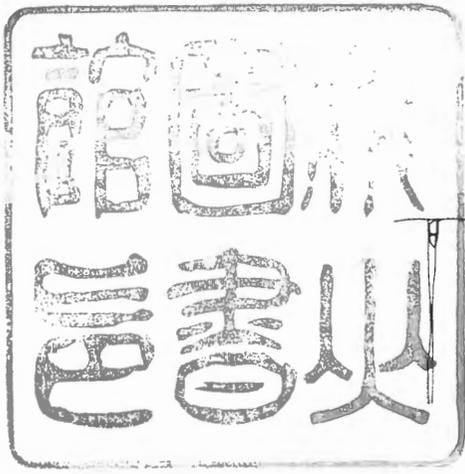
石室内には、切妻型と考えられる須恵質の陶棺が奥壁にそって置かれている。これは後に置き変えられている可能性もあるが、石室幅内にちょうど納まる。陶棺は左右に割けられ、蓋になる屋根部分も別につくられている。脚は円筒のものがそれぞれ 12 ケづつつけられている。

一つの大きさは、幅 62 cm、長さ $9\frac{3}{4}$ cm、高さ 50 cm、^脚円筒(長さ不明)厚さは平均 5 cm ある。屋根部分は不明である。

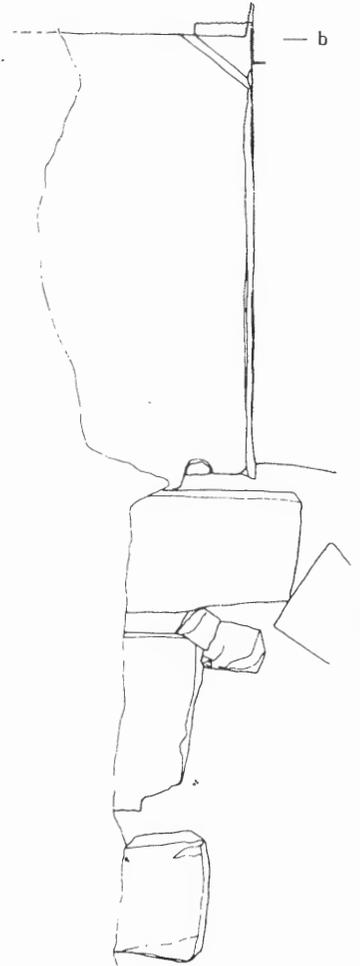
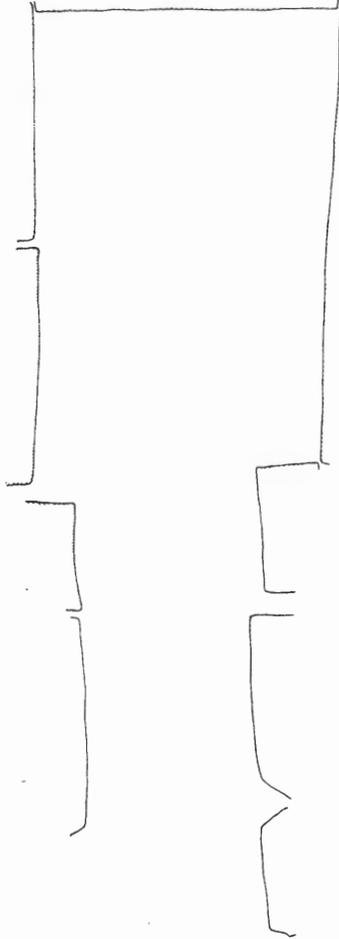
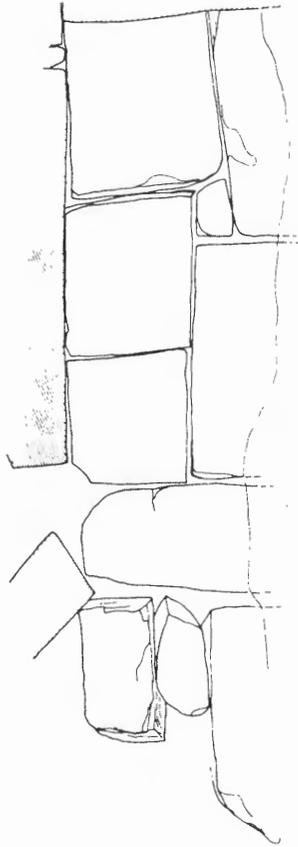
石室内および陶棺内からの出土遺物は、現在の所確認されていない。



付図 2 大谷 1 号墳陶棺



A



a

付図1 大谷1号墳実測図(縮尺1/50)

]